

# グリム兄弟の自伝的記録と書簡について

小林 将輝

## はじめに

グリム兄弟の兄ヤーコプ・グリム（1785-1863）と弟のヴィルヘルム・グリム（1786-1859）が編纂した『子供と家庭のメルヒェン集（Kinder- und Hausmärchen）』（初版第1巻1812年，第2巻1815年刊）は，これまで一般の関心のみならず，様々な研究上の関心も集めてきた。また，言語学，神話学，ゲルマン文学，スラブ，ケルト等の文献学，法学，歴史学，民俗学などの広い分野に関わる兄弟の研究活動は，それぞれの学問領域においても広く研究対象となっている。そして興味深いのは，こうしたグリム兄弟の全般にわたる活動に関する研究のみならず，グリム兄弟自身に関する研究，すなわち伝記的な事柄についても，長い間，熱心な関心を集めてきており，すでに膨大な研究業績が積みあがっているという事実である。また，研究書ではない一般向けの伝記もこれまで多く出版され，日本の研究者による伝記も多く出版されてきた。

ところで，こうした言わば「グリム兄弟についての研究」に関しては，その当初においては一部の著名な研究者によってもっぱら研究が担われており，それがグリム兄弟という人物像の普及に広く貢献してきたという側面がある。しかしこれまでのこの分野での研究の蓄積によって，また近年はグリム兄弟が書いた手紙の編纂，出版が精力的に行われているが，そういった新しい資料が公開されることによって，兄弟の人物像や当時の生活空間について再評価が行われつつある。このようにグリム兄弟についての研究に注目することは，今後のこの分野における研究の展開を見通すうえで重要であろう。

本論では，まずグリム兄弟の伝記的な事柄に関する研究の量的な現状を概観し整理したうえで，兄弟自身が残した自伝的な事柄に関する資料及び書簡などの一次資料について，現状ではどの程度研究が進められているのかを検討する。

## I グリム兄弟の文献目録と伝記的事柄に関する研究の総数

グリム兄弟自身が書いたものや、これまでに書かれた兄弟に関する様々な文献資料や研究は、研究者によって作成された文献目録から俯瞰することができる。

戦後に出された文献目録で代表的なものとして、ルートヴィヒ・デネケの『ヤーコプ・グリムと弟ヴィルヘルム (Jacob Grimm und sein Bruder Wilhelm)』(1971)がまず挙げられる<sup>1)</sup>。これは、グリム兄弟自身の著作、書簡、それ以外の著作物の一次資料と、ヤーコプが死去した1863年以降から、本書が出版された1971年頃までの、グリム兄弟に関連する文献資料や研究などの二次資料を広く取り上げている。1971年以降に関して言えば、1985年にヤーコプ・グリムの生誕200周年を記念して記念刊行物が多く出版されており、その中でも『グリム兄弟 その人生と影響の記録 (Die Brüder Grimm. Dokumente ihres Lebens und Wirkens)』と、その関連文献においては、兄弟に関する様々な資料がよくまとめられている<sup>2)</sup>。

近年ではカッセルに居を置く「グリム兄弟協会 (Brüder Grimm-Gesellschaft)」が発行する『グリム兄弟協会年報 (Jahrbuch der Brüder Grimm-Gesellschaft)』に掲載されてきた、ベルンハルト・ラウアーによる文献目録が代表的なものとして挙げられるだろう<sup>3)</sup>。この文献目録は1986年以降の文献をまとめたもので、2006年で更新は止まっている。2006年までの21年間で挙げられた文献の総数は2,483件である。この目録はラウアーが知り得た限りの資料をまとめたものであるゆえ、特にドイツで発表された資料が中心となっている。そのため外国で公表された研究が全て網羅されているわけではないが、それでも相当な数であると言えよう。

この文献目録において、集められた資料は6つのカテゴリーに分類されるが、兄弟の伝記的な事柄に関する研究や資料などは「項目Ⅱ」の「伝記に関するもの、往復書簡、同時代人」に掲載されている。この「項目Ⅱ」に含まれる文献の総数は21年間で343件であるから、年間でおよそ16本程度出ていることになる。しかしながら、この分類は公表時から若干の変更が行われており<sup>4)</sup>、そのため、この総数は「伝記に関するもの」「往復書簡」「同時代人」の3つのカテゴリーの21年間の合計数とは、必ずしも一致していない。また、この「項目Ⅱ」にある「同時代人」は、兄弟と交際したクレメンス・ブレンターノや、ヴィルヘルムの息子ヘルマン・グリムなど、兄弟と関係した人物たちに関する文献であり、兄弟の伝記的な事項に主眼を置いたものではない。これらを考慮すると、伝記に関する文献と往復書簡に限った文献数は、もう少し少なく見積もるべきであろう。とはいえ、グリム兄弟の伝記的事項に関しては21年間にわたって関心が継続し、一定数が研究や資料として常に発表されてい

ることがわかる。

## II 伝記的事柄に関する文献資料について

### 1. 伝記的事項に関する文献資料の分類

このように多く刊行された伝記的事項に関する文献を網羅するのは容易ではないが、大雑把に整理し概要を示すことにする。ラウアーの区分にグリム兄弟自身が残した自伝的な記録の項目を加えて大別すると以下ようになる。なお「同時代人」の区分は取り除き、ひとまず「その他」とした。

- (1) 自伝的な記録
- (2) 書簡
- (3) 伝記及び伝記的な研究
- (4) その他

本論では一次資料である(1)及び(2)について、概要を記す。

### 2. 自伝的な記録

グリム兄弟は生前に自伝的な記録となる文章をいくつか残している。まず挙げるべき資料は「自叙伝 (Selbstbiographie)」(1830)であろう<sup>5)</sup>。これは1830年にヤーコプ、ヴィルヘルムがそれぞれゲッティンゲンに移った時までの事を書いたもので、ヘッセン国の学者や作家、芸術家などをまとめたいわゆる紳士録に寄せた文章である<sup>6)</sup>。兄弟の全生涯を見ることはできないが、少年期と青年期の様子が分かる記録として、兄弟の伝記的研究では頻繁に引用される資料である。また同じく若い頃の記録として、ヤーコプの「回想録 (Besinnungen aus meinem Leben)」(1814)もよく参照される<sup>7)</sup>。これは幼少期を過ごしたハーナウ時代の思い出も詳細に書かれている点の特徴である。

ヤーコプ、ヴィルヘルム共に生涯を通じて書いた自伝は存在しないが、短い部分的な記録は幾つかある。ヤーコプのものとしては、ヴィルヘルムが死去した1859年の翌年、1860年に行った講演を文章にした「ヴィルヘルム・グリム追悼講演 (Zur Rede auf Wilhelm Grimm)」(1860)があり、これから兄弟の親密な関係について読み取ることができる<sup>8)</sup>。その他にヤーコプが書いたものには、いわゆる「ゲッティンゲン七教授事件」において、ハノーファー王によってゲッティンゲンから追放

されたことについて書いた弁明書「彼の免職について (Über seine Entlassung)」(1838)がある<sup>9)</sup>。また、晩年に書かれたイタリア、スカンジナビア旅行記「イタリアとスカンジナビアの印象 (Italienische und scandinavische Eindrücke)」(1844)<sup>10)</sup>、あるいは短い「略歴 (Ein Lebensabriß)」(1869)なども<sup>11)</sup>、自伝的内容を含む記録として読めるだろう。

ヴィルヘルムが書いたものは上記の自叙伝以外にはまとまったものはないが、病気のため死期を悟って兄に書き溜めた手紙 (1811, 1812)や<sup>12)</sup>、ヴィルヘルムの長男ヘルマンがグリム兄弟の思い出を書いた文章に、ヴィルヘルムが書いた子どもの頃の思い出を一部引用した部分があり<sup>13)</sup>、それらが兄弟の関係を理解するのにある程度役に立つ。また、ヘルマンは上記「ヴィルヘルム・グリム追悼講演」に寄せた「付録」を書いており、近親者の記録としてよく読まれた<sup>14)</sup>。少し変わった資料では、ヴィルヘルムが自身の夢を記録したものがある。ヴィルヘルムは若い頃に、自分が見た夢や夢想的な経験をヤーコプに報告することがあったが<sup>15)</sup>、1810年頃には実際に夢を記録していたことをハインツ・レレケが偶然に遺稿から発見し、1981年にそれを公開している<sup>16)</sup>。

ヘルマンと同じようにグリム兄弟の近親者の中では、グリム家の末弟で、後のカッセルの芸術アカデミーの教授になったルートヴィヒ・エーミール・グリムがまとまった自伝を残している<sup>17)</sup>。ルートヴィヒはフリードリヒ・カール・フォン・サヴィニーやクレメンス・ブレンターノ、アヒム・フォン・アルニム、ベッティーナ・ブレンターノなどグリム兄弟と交流のあった人物たちと親しく交際したため、弟の目から見たグリム兄弟の様子とグリム家の様子のみならず、兄弟の交友関係や友人たちの人となりも本書から読み取ることが出来る。

### 3. 書簡

グリム兄弟は生涯を通じて多くの手紙を書き、また多くの手紙を受け取った。兄弟は若い頃から国内外の知り合いに熱心に手紙を書き、兄弟が一時的に離れて暮らした時には互いに対しても頻繁に手紙を出しあった。ベルリンのフンボルト大学では、1986年以来、兄弟の書簡の目録を作成するプロジェクトを進めたが、その結果、書簡の総数は約30,000通にのぼり、手紙のやりとりをした相手は2,000人になると明らかにしている<sup>18)</sup>。同じように書簡をまとめるプロジェクトを進めているカッセルのグリム兄弟協会によると、兄弟はそれぞれが1日1通は手紙を書いており、死ぬまでに一人あたり18,000通の手紙を書いたとされる。うち現存する手紙の総数は

25,000通と見積もられ、手紙をやりとりした相手は前者と同じく約2,000人として  
いる<sup>19)</sup>。

クレメンス・ブレンターノとその妻アウグステ・ブスマンの夫婦喧嘩を取り上げて、  
本にしたハンス＝マグヌス・エンツェンスベルガーは、その書においてグリム  
兄弟を含む多くの当事者たちの手紙を引用したが、「まるで仲間の誰もが、仲間の  
誰かに手紙を書いて、夜を過ごしていたかのようです」と、当時の人々の手紙を書  
くことへの情熱を皮肉っている<sup>20)</sup>。当時は手紙を書くという行為が、知識人たちの  
間では重要なコミュニケーション手段であったため、このような膨大な量の手紙が  
生み出されたわけであるが、グリム兄弟はそのような社会的習慣を体現する代表的  
な人物であったということが言えるだろう。

このような膨大な量の書簡は、上記のプロジェクトが進められる以前は、個々の  
研究者によって、兄弟の死後まもなくまとめられていった。たいていは手紙をやり  
とりした人物ごとにまとめられ、一冊の本や学術誌の記事として公開された。また、  
これらの書簡集、個々の手紙についてまとめた文献目録も存在する。ここではデネ  
ケの文献目録を参考にしながらその概要を示したい<sup>21)</sup>。

グリム兄弟から発信された手紙の概要は、彼ら自身が残したメモや日記の記録か  
らある程度分かる。しかし、その発信された自筆の手紙そのものは各地の図書館や  
博物館に所蔵されたり、個人が所有するなどして世界中に散逸している。また、何  
らかの理由で失われてしまったものや、未発見のものも多い<sup>22)</sup>。

対してグリム兄弟が受け取った手紙は本人たちによってよく保管された。ヤーコ  
プの死後（1863年）、紆余曲折を経て、ヴィルヘルムの息子ヘルマンはその手紙の  
相当数を当時の王立図書館（現ベルリン州立図書館）に、兄弟の他の遺稿や資料と  
合わせて寄贈した。そのさいヘルマンは図書館にそれらの資料を所蔵するための専  
用の棚を贈ったため、グリム兄弟の遺稿資料は通称「グリム棚  
（Grimm-Schränke）」と呼ばれた。現在これは「グリム遺稿（Nachlaß Grimm）」  
と呼ばれている。ただし一部の資料は、所蔵の過程やグリム家の家庭の事情により  
消失した<sup>23)</sup>。この王立図書館に収蔵されたメモや手稿を含む、自筆手紙の詳細なり  
ストは、ハンス・ダフィスが『グリム棚の所蔵目録（Inventar der  
Grimm-Schränke）』において1923年に公開している<sup>24)</sup>。

初期に出されたグリム兄弟の書簡集で、比較的有名なものをいくつか例として挙  
げてみると、1886年にエドムント・シュテンゲルによって編纂された、グリム兄弟  
がヘッセン国の知り合いへ出した手紙をまとめたものがある<sup>25)</sup>。また、このシリー

ズの第3巻では、グリム兄弟の親友であったパウル・ヴィーガンツトへ発信された手紙のみをまとめている<sup>26)</sup>。ヴィーガンツトは兄弟がカッセルでギムナジウムに通った時以来の学友であり、ヤーコプの「自叙伝」にも名前が挙がる人物で、生涯を通じて交友関係を持った人物である。同じく「自叙伝」に名前が挙がっているエルンスト・フォン・デア・マルスブルクという友人がいるが、こちらも同じく手紙28通をまとめた書簡集が出ている<sup>27)</sup>。マルスブルクの子孫がグリム兄弟から受け取った手紙を保存しており、また、マルスブルクが兄弟に送った手紙は上述のグリム遺稿に収められていたので、編纂者がこの両者から許可を得て、双方の手紙を公開した<sup>28)</sup>。

同じく若い頃の手紙として言及しなくてはならないのは、『青春期のヤーコプとヴィルヘルム・グリムの往復書簡 (Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit)』(1880) (以下『青春期の往復書簡』) である<sup>29)</sup>。これはグリム兄弟がその青年期において、何度か離れて暮らさなければならなくなった時に、互いに送りあった手紙をまとめたものである。手紙の文面には兄弟が互いへ向けた愛情表現を多く見出すことができ、また学問の世界へと足を踏み出す黎明期の兄弟の思想や研究への取り組みも読み取ることができるため、兄弟の伝記的研究においては長らく頻繁に参照される資料となった。初版は1880年と早い時期に出ており、兄弟像を解明する資料として、その後の研究に大きな影響を与えたと言える。

上記書簡集と同様の観点から、ヴィルヘルム・ショーフによる『サヴィニーに宛てたグリム兄弟の手紙 (Briefe der Brüder Grimm an Savigny)』(1953)も重要である<sup>30)</sup>。グリム兄弟の交友関係において、マルスブルク大学法学部の員外教授であったサヴィニーは兄弟が学問の道へ進むにあたって大きな役割を果たした。このサヴィニーに対して兄弟が出した手紙は、長い間公開が望まれていたが、第二次世界大戦後になってから、ショーフがサヴィニーの子孫から出版許可を取り付けて公開されることになった<sup>31)</sup>。収録されているのはグリム兄弟が発信した手紙199通である。サヴィニーが兄弟に宛てた手紙は収録されていないため、相互のやり取りの文脈を正確に理解するためには、サヴィニー自身の書簡集も合わせて見る必要がある<sup>32)</sup>。

ショーフが編纂したものの中では、『グリム兄弟の知られていない手紙 (Unbekannte Briefe der Brüder Grimm)』(1960)もこれまでの伝記的研究においては比較的によく用いられている<sup>33)</sup>。これは、先に出したサヴィニーへの書簡集を補完する意図のもと、それまで公開されていなかったグリム兄弟が発信した様々な相手への手紙を収録したものである。ショーフは図書館や博物館、古書店、個人な

どが所有していた手紙、計270通を集め、本書に収録した。

初期の伝記研究においては、兄弟自身が書いた「自叙伝」と合わせて、これらのような言わば「定番」とも言える書簡集を利用して、兄弟像を再構成する傾向があった。特に兄弟の少年期及び青年期に関しては、青年期から中年期以降の莫大な量の手紙が存在することと比較すれば、この頃の手紙の量は限られているため、これら著名な資料を中心に据えることで、伝記的研究の質はある程度担保されていると見なされてきたと言えるだろう。

しかし、グリム兄弟に関する研究においては、その当初から一次資料の整備の必要性が言われてきており、とりわけ書簡についてはその概要の把握と全集の整備が繰り返し求められてきたのも事実である。特に戦後になると、先に見たように、膨大な量の手紙が存在するものの、いまだにその半分が未公開であることや、自筆手紙を文字起こしして出版されたもののなかには、その作成過程での文章の打ち間違いなどが生じていること、また、手紙へつけられた注釈や説明がその後の研究の成果によって更新する必要性が生じた等、多くの問題点が指摘されるようになる。また、上に挙げた書簡集でも見られたように、グリム兄弟から発信した手紙のみ、あるいはその逆のグリム兄弟へ宛てた手紙の書簡集などが出されてきたが、往復書簡という形式にすることが望ましいと見なされるようになった。双方の手紙を載せることによって、相互のやり取りの細かいニュアンスや正確な文脈を理解できるのではないかと考えられるように至ったのである。グリム兄弟の一次資料の研究に長く関わってきたデネケが「グリムの往復書簡の全集は長い間切実に望まれてきたものである」と述べるように<sup>34)</sup>、兄弟の往復書簡集を組織的に編纂する事業がいつそう要請されるようになったのである。

グリム兄弟の書簡をめぐる研究はこのような段階に至ったわけだが、その結果、先に述べたように二つの研究グループが新たに書簡集を編纂するプロジェクトを押し進めることになる。

まず1986年にベルリンのフンボルト大学において、グリム兄弟が出した手紙のリストを作成するプロジェクトがはじまった。これには、これまで何度か名前が挙がったグリム研究の大家であるデネケなども協力し、また、ドイツ研究振興協会の援助も受けて、2001年までに21,000通の手紙のリストを完成させている。このリストが整備されることによって、グリム兄弟の往復書簡集の新しい版、通称「批判版 (Kritische Ausgabe)」を編纂することが1991年に計画されるに至った。このプロジェクトはドイツ各地の研究者が数名でグループをつくり、それぞれ担当する書簡

集をまとめるという形をとっているが、年に1回の編集者会議を開くことによって、その編集方針を討論し調整している。事務的な役割はフンボルト大学の「グリム往復書簡支部 (Arbeitsstelle Grimm-Briefwechsel an der Humboldt-Universität)」が担っている<sup>35)</sup>。

その結果、2001年に第1巻の『グリム兄弟の往復書簡』(1.1.) (以下『批判版 往復書簡』) が出版され、その後、順調に発行されて、2015年には歴史家グスタフ・フライタークらとの往復書簡を扱った第7巻が出た<sup>36)</sup>。ただし『批判版 往復書簡』のみ、第1巻の2『伝説索引 (Sagenkonkordanz)』(2006)と第1巻の3『注釈 (Kommentar)』(2013)といわば資料編も出ているため、7巻とはいえ9冊からなっている<sup>37)</sup>。

この『批判版 往復書簡』はヤーコブとヴィルヘルムが生涯を通じて互いに出した手紙の多くを網羅している。例えば、先に挙げた『青春期の往復書簡』では、1805年から1815年までの兄弟の青年期10年間の手紙を掲載しているが、その総数は166通である。対して『批判版 往復書簡』では同じ期間に出された手紙として、213通の手紙を掲載している。このように「批判版」では、単純に掲載数から見ても大きな研究の進歩が背景にあることがわかる。また、ダフィスの『グリム棚の所蔵目録』に掲載された、ヴィルヘルムが死期を悟って兄に残そうとした手紙も収録されているうえに、兄弟が生前に書いた「遺書」も載せられている。

『批判版 往復書簡』に掲載された手紙に関しては、別巻の『注釈』を見ることで、手紙で言及されている人物や出来事について非常に詳しい情報を得ることが出来る点も重要である。この点において、注釈をリニューアルするというこのプロジェクトの当初の目的を果たしていると言えるだろう。「批判版」においてこのように注釈が大幅に更新され、内容が豊かになったことによって得られる恩恵は非常に大きい。これまで一部の研究者のみが取り扱ってきた手紙がまとめて公開されたということのみならず、新しい注釈も出揃ったことで、グリム兄弟の伝記的な事柄について見るための新たな研究の基盤が整ったと言えるだろう。

フンボルト大学に事務局を置くいわばベルリングループに対し、カッセルに拠点を置く「グリム兄弟協会」を中心とした研究グループも、近年手紙の編纂を進めている。このグループは、通称「カッセル版 (Kasseler Ausgabe)」と呼ばれる研究シリーズにおいて、これまで2冊の書簡集を出した。最初の書簡集は『グリム兄弟とヘルマン・グリムの往復書簡 (Brüder Grimm Briefwechsel mit Herman Grimm)』であり、これはベルリングループに先駆けて1998年に出ている<sup>38)</sup>。また、



他にも資料編としてヤーコプのドイツ文学史の講義録を出している<sup>39)</sup>。

ベルリングループの「批判版」と、この「カッセル版」の大きな違いは、元原稿である手書きの表記をどの程度再現するかという点である。「批判版」は、例えば手書き原稿にある下線も再現するなど一定の再現の試みをしているものの、読みやすさに主眼を置いているため、その再現の程度は限られている。それに対して「カッセル版」は現在では使われなくなった長い s(ſ) の再現や、書き手の略字や訂正した内容なども再現するなど、元の手紙の手書きの雰囲気をもより厳密に追及している<sup>40)</sup>。

## おわりに

第1章で見たように、グリム兄弟が死去した直後から、兄弟の伝記的事項に関する研究は行われてきており、現在においてもなお多くの研究が行われている。グリム兄弟は、「グリム童話」の編纂者というだけではなく、さまざまな学問領域において大きな業績を残した研究者でもあり、また、「ゲッティンゲン七教授事件」のような、大きな歴史的な事件にも関わってきた人物である。特にヤーコプに関して言えば、晩年ではドイツ文学者会議の議長になり、また、国民議会の議員に選出されるなど、ドイツの知識層を代表する一人として、ドイツの近代の政治や歴史とも深く関わっている。また、兄弟やその知人たちによって形成された膨大な量の手紙が行きかう交友サークルの存在は、19世紀ドイツの精神史の一端をみるうえで貴重で情報も提供する。そのような様々な点から、グリム兄弟自身について強い関心が呼び起こされるのは自然なのかもしれない。いずれの理由であるにしても、このように多くの研究が出続けている事実は、いまなお継続して、グリム兄弟という人物への関心が高くあることを端的に物語っているとと言えるだろう。

また、近年になって往復書簡の全集のプロジェクトが進められていることで、グリム兄弟の伝記的な事柄について研究する上での基本的な前提条件が整えられつつある。こうした新しい書簡集の登場によって、伝記研究はあらたな段階に至ったと言える。それまで頻りに用いられていたなじみのある書簡集から、よく整備され、注釈を備えた新しい書簡集が用いられるようになることによって、これまで提示されてきたグリム兄弟像の個々のエピソードにおける解釈の変更のみならず、新たな解釈が生まれることも大いに起こりうるのである。

<sup>1)</sup> Ludwig Denecke: *Jacob Grimm und sein Bruder Wilhelm*. Stuttgart: Metzler 1971. 収録されている文献資料の一部にはデネケによる短い批評が入っているため、文献の中身を計るのに一定の指標になる。

<sup>2)</sup> Dieter Hennig u. Bernhard Lauer (Hg.): *200 Jahre Brüder Grimm. Die Brüder Grimm. Dokumente ihres Lebens und Wirkens*. Kassel: Weber & Weidemeyer 1985. Vgl. auch Hans-Bernd Harder u. Ekkehard Kaufmann (Hg.): *200 Jahre Brüder Grimm. Die Brüder Grimm in ihrer amtlichen und politischen Tätigkeit. Teil 1: Ausstellungs Katalog*. Kassel: Weber & Weidemeyer 1985; Hans-Bernd Harder, Dieter Hennig u. Bernhard Lauer (Hg.): *200 Jahre Brüder Grimm. Die Brüder Grimm in ihrer amtlichen politischen Tätigkeit. Teil 2: Aufsätze, Werkverzeichnis, Genealogie, Register*. Marburg: Hitzeroth 1989.

<sup>3)</sup> このラウアーによる文献目録は『グリム兄弟協会年報』(以下『年報』)の第1巻(1991年刊)から収められている。この時の文献目録は1986年から1990年の4年間に公表された文献を収録していたが、以後毎年『年報』に掲載され、公表時の前年1年間に発表された文献を収録するようになった。例えば、1992年『年報』第2巻に掲載された文献目録では、1991年の間に発表された文献を取り上げるという具合である。これは2000年刊行の第10巻まで続くが、2001年と2002年の合本となった第11-12巻、2003年と2004年の合本となった13-14巻では掲載されなかった。2005年と2006年の合本(公刊は2010年)15-16巻に、2000年から2006年までの文献をまとめて収録した目録が掲載されたが、その後は『年報』自体の発刊が滞っている。Bernhard Lauer: *Bibliographie*. In: *Jahrbuch der Brüder Grimm-Gesellschaft*. Bd. 1. Kassel 1991, S. 205-254; Bd. 2. 1992, S. 213-233; Bd. 3. 1993, S. 147-157; Bd. 4. 1994, S. 241-251; Bd. 5. 1995, S. 197-208; Bd. 6. 1996, S. 207-217; Bd. 7. 1997, S. 131-140; Bd. 8. 1998, S. 131-139; Bd. 9. 1999, S. 141-154; Bd. 10. 2000, S. 169-184; Bd. 15-16. 2010, S. 143-189.

<sup>4)</sup> 「伝記に関するもの」が含まれる「項目Ⅱ」は、1991年にこの文献目録が発表された当初は「Ⅱ 全般、伝記に関するもの、往復書簡」と題されていたが、1993年にこれに「同時代人」が加わり、さらに1994年には「全般」が「項目Ⅰ」に移った。結果、1994年以降の分類は「Ⅱ 伝記に関するもの、往復書簡、同時代人」となっている。

<sup>5)</sup> Jacob Grimm: *Selbstbiographie*. In: Karl Wilhelm Justi: *Grundlage zu einer Hessischen Gelehrten-, Schriftsteller- u. Künstler-Geschichte vom Jahre 1806 bis zum Jahre 1830*. Marburg 1831, S. 148-164. (Reprint); vgl. auch ders.: *Selbstbiographie*. In: *Kleinere Schriften 1*. Hrsg. v. Karl Müllenhoff. [Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Berlin 1864.] Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung 1965, S. 1-24. ヤーコプの自伝についてはこれまでいくつかの翻訳が出ている。ヤーコプ・グリム「自叙伝」、『ドイツロマン派全集第15巻 グリム兄弟』(小澤俊夫, 寺岡壽子, 原研二, 堅田剛, 谷口幸男訳, 国書刊行会, 1989年)所収, 115-138頁。ヤーコプ・グリム「ヤーコプ・グリム自伝(1831年)」、『グリム兄弟自伝・往復書簡集』(山田好司訳, 本の風景社, 2002年)所収, 7-37頁。Wilhelm Grimm: *Selbstbiographie*. In: Justi: a. a. O., S. 164-183; vgl. auch ders.: *Selbstbiographie*. In: *Kleinere Schriften 1*. Hrsg. v. Gustav

---

Hinrichs. Berlin: Ferd. Dümmler 1881, S. 3-27. ヴィルヘルム・グリム「ヴィルヘルム・グリム自伝 (1830年)」, 『グリム兄弟自伝・往復書簡集』所収, 39-74頁。

<sup>6)</sup> この本に自伝を掲載することになった経緯については以下を参照せよ。Vgl. Ingeborg Schnack (Hg.): Die Selbstbiographien von Jacob und Wilhelm Grimm. Aus dem Juli und September 1830. In: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft. 2. 1958, S. 162-217.

<sup>7)</sup> Jacob Grimm: Besinnungen aus meinem Leben. In: Hans Daffis (Bearbeitet): Inventar der Grimm-Schränke in der preussischen Staatsbibliothek. Leibzig: Karl W. Hiersemann 1923, S. 98-110.

<sup>8)</sup> Jacob Grimm: Rede auf Wilhelm Grimm. In: Jacob Grimm: Kleinere Schriften 1, S. 163-187. ヤーコブ・グリム「ヴィルヘルム追悼講演」, 『ドイツロマン派全集 第15巻 グリム兄弟』所収, 139-158頁。ヤーコブ・グリム「ヴィルヘルム・グリムをしのぶ講演 (1860年)」, 『グリム兄弟自伝・往復書簡集』所収, 75-106頁。

<sup>9)</sup> Jacob Grimm: Über seine Entlassung. Berlin: W. Keiper 1945.

<sup>10)</sup> Jacob Grimm: Italienische und scandinavische Eindrücke. In: Jacob Grimm: Kleinere Schriften 1, S. 57-82.

<sup>11)</sup> Jacob Grimm: Ein Lebensabriß. In: Jacob Grimm: Kleinere Schriften 8. Hrsg. v. Karl Müllenhoff. [Rprografischer Nachdruck der Ausgabe Gütersloh 1890.] Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung 1966, S. 459-461.

<sup>12)</sup> Vgl. Daffis, a. a. O., S. 110-115, und vgl. auch Heinz Rölleke (Hg.): Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm. Teil 1 Text. Stuttgart: Hirzel 2001, S. 787-794. [Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 1. 1.] この手紙はダフィスが初めて紹介したが、その後の研究で資料の年代に不備があることが指摘され、Röllekeが編纂した批判版書簡集ではその点が修正されて掲載されている。不備の内容については以下を参照せよ。Vgl. Heinz Rölleke: Wilhelm Grimms Traumtagebuch. In: Brüder Grimm Gedenken. Bd. 3. Marburg: Elwert 1981, S. 15-37, hier (Anm. 17) S. 35.

<sup>13)</sup> Herman Grimm: Die Brüder Grimm und die Kinder- und Hausmärchen. In: Herman Grimm: Beiträge zur Deutschen Culturgeschichte. Berlin 1897, S. 214-247. (Reprint) ヘルマン・グリム「グリム兄弟の思い出」, 『ヘルマン・グリム小品選』(山田好司訳, 本の風景社, 2013年) 所収, 7-43頁。なお山田はアルテミス&ヴィンクラー社が1993年に出した『グリム童話集』に掲載された序文を翻訳の底本としている。

<sup>14)</sup> Herman Grimm: Anhang zu Jacob Grimms Rede auf Wilhelm Grimm, gehalten in der Akademie der Wissenschaften den 5. Juli 1860. In: Das Jahrhundert Goethes. Hrsg. v. Reinhard Buchwald. Stuttgart: Kröner 1948, S. 95-110; vgl. auch ders.: Zur Rede auf Wilhelm Grimm. In: Kleinere Schriften 1., S. 178-187. 「付録 ヤーコブ・グリム「ヴィルヘルム・グリムをしのぶ講演」への付記(晩年のグリム兄弟回想記)」, 『ヴィルヘルム・グリム小品選』(山田好司訳, 本の風景社, 2012年) 所収, 83-101頁。なお「小論集 (Kleinere

Schriften)」版では冒頭部分が少し長くなっている。

<sup>15)</sup> 例えばヤーコプがパリに行き、兄弟が離れ離れに暮らした時期である1805年2月に出されたヴィルヘルムの手紙では、ヤーコプが夜にひょっこりと部屋に現れることを夢想している。Vgl. Rölleke: Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm, S. 30. また、病気で死を悟った時にヤーコプに宛てた手紙でも、兄に自分が見た夢を熱心に報告している(注12も参照せよ)。Vgl. Daffis: a. a. O., S. 115-118, und vgl. auch Rölleke: Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm, S. 785-794, und auch Anm. 12.

<sup>16)</sup> Vgl. Rölleke: Wilhelm Grimms Traumtagebuch.

<sup>17)</sup> Ludwig Emil Grimm: Erinnerungen aus meinem Leben. Hrsg. v. Wilhelm Praesent. Kassel: Basel: Bärenreiter Verlag 1950. ルートヴィヒ・エーミール・グリム『わが生涯の回想 グリム兄弟の弟ルートヴィヒ・エーミール・グリム自伝』山田好司訳、本の風景社、2010年(上巻)、2011年(下巻)。なお山田はアドルフ・シュトルが編纂したLeipzig版を底本として使用しており、これは上記プレゼントが編集したKassel版とは若干異なる。

<sup>18)</sup> Rölleke: Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. S. 6.

<sup>19)</sup> Holger Ehrhardt, Rotraut Fischer, Ewald Grothe, Bernhard Lauer u. Bärbel Plöntner: Die kritisch-kommentierte Ausgabe der Briefwechsel der Brüder Grimm. In: Jahrbuch der Brüder Grimm-Gesellschaft. Bd. 8. Kassel 1998, S. 9.

<sup>20)</sup> Hans Magnus Enzensberger: Requiem für eine romantische Frau. Die Geschichte von Auguste Bussmann und Clemens Brentano. Berlin: Friedenauer Presse 1988, S. 226. H・M・エンツェンスベルガー編『「愛」の悪魔』川西英沙訳、晶文社、2001年。

<sup>21)</sup> Ludwig Denecke: Bibliographie der Briefe von und an Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. In: Schriften der Brüder Grimm-Gesellschaft Kassel e. V., Nr. 7. (Sonderdruck von Aurora, Jahrbuch der Eichendorff-Gesellschaft 43. 1983). なおこの文献目録は、デネケ自身が『ヤーコプ・グリムと弟ヴィルヘルム』に掲載した文献目録を大幅に改訂したものである。Vgl. auch ders.: Jacob Grimm und sein Bruder Wilhelm, S. 5-29.

<sup>22)</sup> Denecke: Bibliographie der Briefe von und an Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, S. 184.

<sup>23)</sup> グリム兄弟の死後、兄弟の蔵書や資料、あるいは手書きのメモや手紙がたどった経緯については、以下の2点を参照せよ。Ingeborg Stolzenberg: Der schriftliche Nachlaß der Brüder Grimm. In: 200 Jahre Brüder Grimm, S. 113-132; Ludwig Denecke: Einführung. In: ders. u. Irmgard Teitge (Erarbeitet) u. Friedhilde Krause (Hg.): Die Bibliothek der Brüder Grimm. Weimar: Böhlau 1989, S. 9-19.

<sup>24)</sup> Daffis: a. a. O.

<sup>25)</sup> Edmund Stengel (Hg.): Private und amtliche Beziehungen der Brüder Grimm zu Hessen. Bd. 1. Briefe der Brüder Grimm an hessische Freunde. Marburg: Elwert 1886. (Reprint).

<sup>26)</sup> Edmund Stengel (Hg.): Private und amtliche Beziehungen der Brüder

---

Grimm zu Hessen. Bd. 3. Briefe der Brüder Grimm an Paul Wigand. Marburg: Elwert 1910.

<sup>27)</sup> Wilhelm Schoof (Hg.): Briefwechsel der Brüder Grimm mit Ernst v. d. Malsburg. In: Zeitschrift für deutsche Philologie. 36. 1904, S. 173-232. (Reprint).

<sup>28)</sup> Ebd., S. 173.

<sup>29)</sup> Hermann Grimm u. Gustav Hinrichs (Hg.): Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm aus der Jugendzeit. [Zweite, vermehrte u. verbesserte Auflage v. Wilhelm Schoof] Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger 1963. 初版はヘルマンの協力のもとヒンリクスの手によって既に1880年に出ている。山田好司による翻訳もあるが、山田は上記のショーフによる改訂版を底本としている。『グリム兄弟自伝 往復書簡集』山田好司訳、本の風景社、2002年(初巻)、2003年(第2巻)、2004年(第3巻)、2005年(第4巻)、2007年(第5巻)。

<sup>30)</sup> Wilhelm Schoof (Hg.): Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Berlin: Erich Schmidt Verlag 1953.

<sup>31)</sup> Ebd., S. IXf.

<sup>32)</sup> Adolf Stoll: Der junge Savigny. Berlin: Carl Heymann 1927. ただし本書ではサヴィニー発信の1810年までの手紙のみ扱っており、また、グリム以外にもサヴィニーが発信した様々な宛先への手紙が掲載されている。グリム兄弟に宛てた手紙は217通のうち26通に過ぎない。

<sup>33)</sup> Wilhelm Schoof (Hg.): Unbekannte Briefe der Brüder Grimm. Bonn: Athenäum 1960.

<sup>34)</sup> Denecke: Bibliographie der Briefe, S. 186.

<sup>35)</sup> Rölleke: Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm. S. 5-8.

<sup>36)</sup> Else Hünert-Hofmann, Jürgen Jaehrling, Philip Kraut u. Uwe Meves (Hg.): Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm mit Gustav Freytag, Moriz Haupt, Heinrich Hoffmann von Fallersleben und Franz Joseph Mone. Stuttgart: Hirzel 2015 [Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 7.].

<sup>37)</sup> Heinz Rölleke (Hg.): Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm. Teil 2 Zusätzliche Texte. Sagenkonkordanz. Stuttgart: Hirzel 2006 [Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 1. 2.]; Stephan Bialas-Pophanken (Verf. u. Hg.): Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm. Teil 3 Kommentar. Stuttgart: Hirzel 2013 [Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 1. 3.].

<sup>38)</sup> Holger Ehrhardt (Hg.): Brüder Grimm Briefwechsel mit Herman Grimm. Kassel; Berlin: Verlag der Brüder Grimm-Gesellschaft 1998 [Brüder Grimm Werke und Briefwechsel Kasseler Ausgabe. Briefe Bd. 1.].

<sup>39)</sup> Matthias Janssen (Hg.): Jacob Grimm Vorlesung über deutsche Literaturgeschichte. Kassel; Berlin: Verlag der Brüder Grimm-Gesellschaft 2005 [Brüder Grimm Werke und Briefwechsel Kasseler Ausgabe. Materialien Bd. 1.].

---

<sup>40)</sup> 批判版とカッセル版の編集方針については、それぞれ以下を参照せよ。Rölleke: *Briefwechsel der Brüder Jacob und Wilhelm Grimm*, S. 799-803; Ehrhardt: *a. a. O.*, S. 29-31.